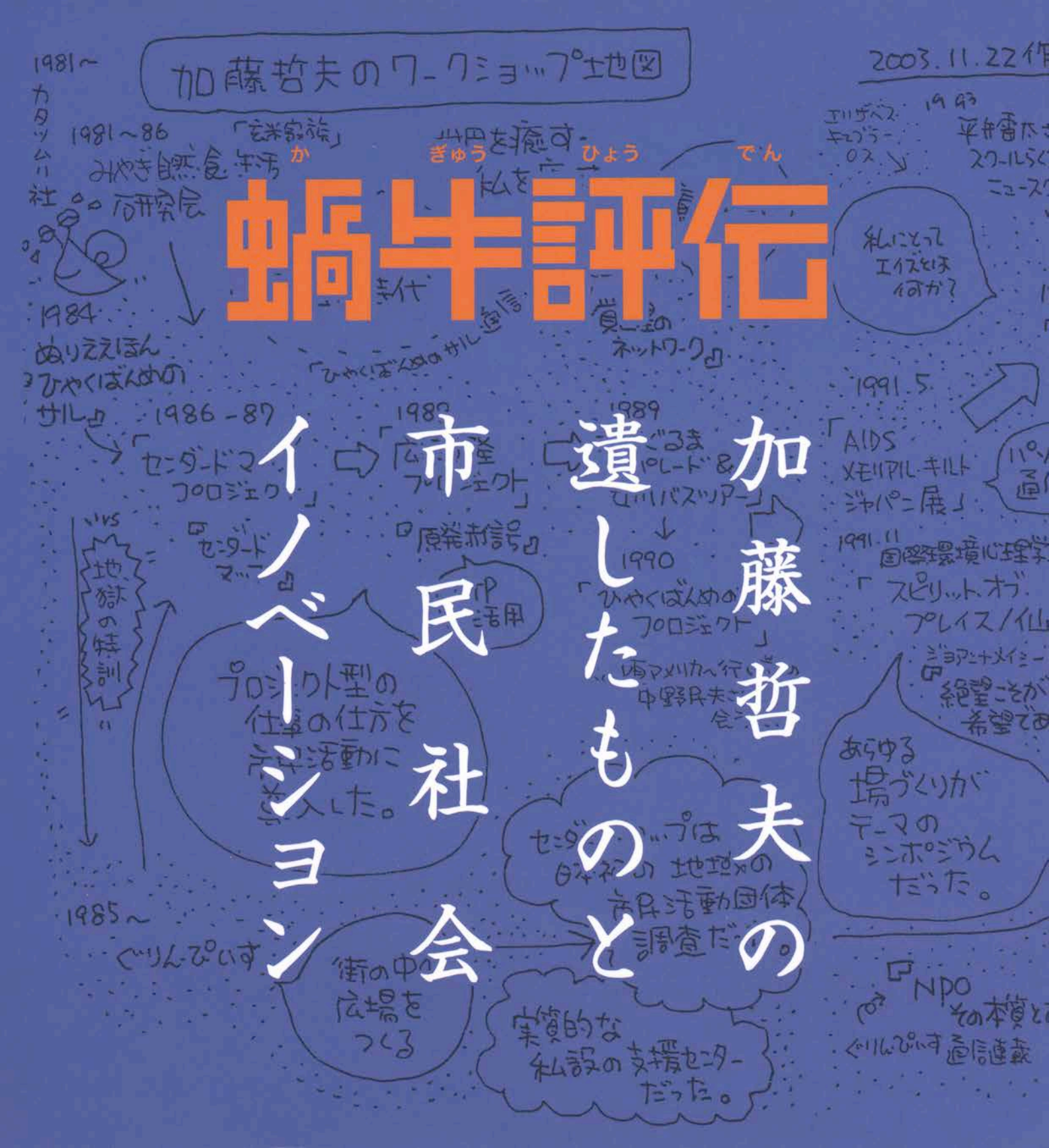
蝸牛評伝

加藤哲夫の遺したものと市民社会イノベーション



加藤哲夫の
遺したものと
市民社会
イノベーション

蝸牛評伝

か ぎゅう ひょう でん

K-PROJECT 編集委員会・編

この冊子は、２０１１年８月26日に亡くなられた加藤哲夫さんが残された膨大な資料のデジタルアーカイブ化とＮＰＯ支援事業についてまとめたものです。デジタルアーカイブ事業は、加藤さんの名前の頭文字を取って「Ｋ・ＰＲＯＪＥＣＴ」と呼ばれていますが、この冊子ではこのプロジェクトの紹介のほかに、生前加藤さんとゆかりのあった方々で、現在もさまざまな分野で活躍されている皆さんの聞き取りや、加藤さんの残したたくさんの書籍の紹介も行われています。

言うまでもなく、加藤哲夫さんは、日本の非営利活動と市民社会構築のパイオニアであり、リーダーでした。私が加藤さんと最初にお会いしたのは１９９０年代前半でしたが、その後亡くなられるまでの15年以上にわたって、せんだい・みやぎＮＰＯセンターを中心に活動を共にしてきました。日本で最初の本格的な中間支援組織であるせんだい・みやぎＮＰＯセンターの設立に始まり、仙台市との協働のもと、これもわが国で初の公設市民営の仙台市市民活動サポートセンターの設立など、加藤さんの活動は、常に時代の先端を見つめ、市民社会の未来を切り拓くものでした。限られた期間とはいえ、加藤さんと活動を共にできたことは、私たちの人生にとって大きな誇りといえるものです。今回のアーカイブ化されたあの独特な図や蝸牛（かたつむり）のトレードマークを見ると、改めて加藤さんのありし日の姿がまざまざと目に浮かんできます。

加藤さんは実に幅広い交流サークルをもち、多様な顔をお持ちでした。交流のあった方々は現在もそれぞれの現場で活躍され、あるいは東日本大震災の復興活動に深く関わっておられます。Ｋ・ＰＲＯＪＥＣＴは、けっして加藤さんの残された遺産を整理したものにとどまることなく、今後も復興後の市民社会の未来を指し示す羅針盤になるものと私たちは確信しています。

最終になりましたが、このＫ・ＰＲＯＪＥＣＴを支援していただいた公益財団法人日本財団様に深く感謝申し上げます。

特定非営利活動法人　せんだい・みやぎＮＰＯセンター　代表理事　**大滝 精一**

２０１４年に発足した「Ｋ・ＰＲＯＪＥＣＴ」は、加藤哲夫氏の残した資料の保存と活用を目的に結成されました。具体的には、（1）加藤資料のデジタルアーカイブ化、（2）加藤氏の資料や書籍、人脈を活用してのワークショップ、（3）企画展の開催、（4）冊子の作成を実施しています。

デジタルアーカイブ化における作業は、せんだい・みやぎＮＰＯセンターの学生職員方芳（東北大学経済学研究科修士2年）と大津賢哉（宮城教育大学教育学部3年）が中心となって実施しています。彼らは、加藤氏との面識はありません。ちなみに、現在、せんだい・みやぎＮＰＯセンターの職員も半数が加藤氏の逝去後の採用となっており、企画者である私も加藤氏を知りません。そうしたなか、センター内外において、いまでも加藤氏の名前や逸話を多く耳にし、また、加藤氏の書籍を求める人が多くいることに気づきました。非営利組織における社会的共通資本ともいうべき加藤氏の資料を前にし、広く公開することは今センターにいる我々のミッションであると感じました。

そうしたことがきっかけとなって始まったＫ・ＰＲＯＪＥＣＴですが、冊子の刊行には、巻末に記させていただきました、センターＯＢや加藤氏とかかわりのあった方々のご協力を得て、冊子編集委員会を結成し、議論を重ねてきました。加藤氏の功績が、どのような形で、震災復興や地域社会に活かされているのか、そうしたことを明らかにすることを念頭に本冊子を作成いたしました。タイトルは、『蝸牛評伝～加藤哲夫の遺したものと市民社会イノベーション』です。蝸牛（かたつむり）のイラストをトレードマークにした加藤氏、その遺志がどのように引き継がれているのか、東北で活躍する人々への取材、加藤氏の書籍の紹介などを通して考えてみたいと思います。

プロジェクトリーダー　**佐々木秀之**

目次

02 はじめに

03 K-PROJECTとは

04 目次

05 Interview　東北で活躍する５人へのインタビュー

06 前野久美子さん　book cafe 火星の庭店主（宮城県仙台市）
10 三浦隆弘さん　農家（宮城県名取市）
14 大泉大介さん　河北新報社記者（宮城県仙台市）
18 小野寺美厚さん　特定非営利活動法人 ネットワークオレンジ代表（宮城県気仙沼市）
22 玉川啓さん　福島県職員（福島県福島市）
小林直樹さん　浪江町職員（福島県浪江町）

29 Book Selection　ブックセレクション

30 『一冊開眼』
31 『VOICE OF NPO PROJECT まるごと Hypertext Book　2002・2003』
32 『市民の日本語』
33 『市民の日本語へ』
34 『クリーン仙台推進員クリーンメイト活動事例集』

35 Chronicle 加藤哲夫さんのプロフィールと年表

43 あとがき

東北で活躍する5人へのインタビュー

今、東北で、様々な社会課題と
向き合って活動している方々にインタビュー。
それぞれの現場で活躍する5人の話は、
市民社会の未来を切り拓くものだった。

Interview

○前野久美子 さん
book cafe 火星の庭店主（宮城県仙台市）

本をキーワードに、街なかに市民が共有できるパブリックな空間をつくる。

「本とカフェは、相性がいいんです」。棚を埋め尽くすように並ぶ古本と、コーヒーの香りに包まれたカフェスペース。おしゃれな店の構えは、従来の古本屋のイメージとはだいぶ異なる。前野久美子さんは、仙台市青葉区本町で「book cafe 火星の庭」を営む。2000年に店を構えてから、2015年4月で15年になる。前野さんが、火星の庭を開いたきっかけは、ヨーロッパで出会ったブックカフェにあった。日本で見てきたカフェとは違い、店内のあちらこちらで議論が交わされる社交場であり、市民が思いを共有できるパブリックな場所だった。「集まった人々が情報交換し、知らなかった世界に出会い、行動のきっかけになるような場が、自分の住む街にもほしかったんです」と前野さん。店内では、音楽ライブやアート展示、本にまつわる企画やイベントなどを数多く実施。仙台の文化の発信地としての役割を果たしている。

また、2008年からは、仙台の編集者、書店員、出版社などの仲間たちと「Book! Book! Sendai」を開催。「6月の仙台は本の月」をキャッチフレーズに、仙台の街を会場に一箱古本市など多彩なイベントを企画運営してきた。2014年からは、宮城県内で行われる催しをカレンダー形式で表したフリーペーパー「Diary（ダイアリー）」の制作に力を入れている。

本によって視野を広げた少女時代

「周りは田んぼだらけの田舎で生まれ育ったんですよ。全校児童２００人程の小学校に通い。ふだんは野山を駆け巡っていましたね」と前野さん。出身地の福島県郡山市安積町は、典型的な農村集落。集落の結束は固く、その裏側には昔ながらのムラの戒律があった。大工職人の父親は封建的で、それに従順な母親という家庭環境におかれた中で、外の世界を見ることができるのは、学校の図書室に並ぶ本を通してだった。

小学校高学年頃から、アニメや子ども向けの雑誌では物足らず、図書室にある本を借りて読みまくったという。『片耳の大鹿』をはじめとする椋鳩十の作品、ドリトル先生シリーズに興味を抱いた。先生に薦められて読んだのは、沖縄石垣島のおばあさんが戦争体験など自分の娘時代を語る『ヨーンの道』。宮沢賢治や夏目漱石も読破したが、読書傾向は、ノンフィクションやドキュメンタリーが多かった。

小学5年生で、中国大陸で７３１部隊が実施していた人体実験の実態を描いた森村誠一の『悪魔の飽食』を読んだというから驚く。「本を読むことで、自分のいる世界とは違う世界があることを知りました。がちがちの封建的社会への反動なんでしょうね。自分の精神を育てるのは本しかないと思って読んでいましたね。まさしく本に育てられたようなものです」と、当時の自分をふりかえる。

東京へ海外へ、挑戦と失望の繰り返し

いつしかジャーナリストを目指すようになった前野さんは、東京の大学へ進学を希望したが、父親は「女に大学は必要ない！」と反対。結局「調理師になって手に職をつけろ！」と半ば強引な父の手配により仙台の調理師専門学校へ入学した。「当時は、窮屈な家から出ることができさえすれば、どこでも良かった」。

調理師免許を取り、東京・六本木などの飲食店で働くうち、縁あって食品会社の海外派遣女性調理師第一号として、ドイツで働くことになった。海外での暮らしは、ヨーロッパの人々や文化に触れる機会となり、おおいに刺激を受け、いろいろなことを吸収した2年間だった。その後帰国したものの、バブル絶頂時期の浮かれた日本社会の風潮に失望。何の当てもなく仙台で、呆然自失な生活を送っていた。

「ぐりん・ぴいす」で学んだこと

そんな時、ふらっと立ち寄った本屋で手に取った雑誌が『自然食通信』。パラパラめくると、加藤哲夫さんの記事が目に止まった。エコロジーショップ「ぐりん・ぴいす」店主とある。場所は、なんと仙台。その瞬間前野さんは、

「私が働くのは、ここしかない」と思ったという。さっそく履歴書に加え、便箋10枚の論文を書いて同封した。論文名は「日本の農業のこれからについて」。すると、「哲夫さんから電話が来てね。経歴も変わっているし、話を聞くから店においでと言われたの、やったー！」こうして、ぐりん・ぴいすで働くことになったのが１９９２年23歳の頃だった。

前野さんにとって、加藤さんのもとで働いた日々が、本当の意味での大学だったという。「哲夫さんは、私が興味関心を持ったことを解説してくれ、疑問に思ったことに、何でもすぐに答えてくれました。先生であり、精神的な父親でしたね」。前野さんのほかにも、ぐりん・ぴいすには、いろんな人がやって来た。「哲夫さんは、できない人や未熟なものに寛容だったと思いますね。むしろそういう人を大事にしていました」加藤さんのカウンセリングは的確で、頼ってくる人たちを元気にする不思議な力を持っていた。

ブックカフェ火星の庭の誕生

ぐりん・ぴいすで働いて5年を過ぎた頃、「本が好きだから本の傍らで仕事をしたいなあ」と漠然と考えていた前野さんに、「そんなら古本屋、やっちゃいなよ」と加藤さんのひと言。古本屋やるなら、「絶対ヨーロッパで見たカフェもやろう！」それが、「ｂｏｏｋ ｃａｆｅ火星の庭」の誕生だった。ぐりん・ぴいすで働いた経験から、おのずと店内には情報が集まり、仲間が集まりミーティングが行われ、何か活動が生まれるというのは自然な流れだった。火星の庭は、情報発信の場であり、自由な活動の場として、加藤さんが実践してきたことが継承されていった。

「火星の庭では、直接モノを売るだけでなく、チラシを置いたり、イベントをやったり余計なことも結構たくさんやっていますね」と前野さん。「それは、すごく価値のあることなんだと哲夫さんが言うんです。目先の売り上げに捉われず、お客さんを喜ばせてあげなさい。それが、信頼につながるからねって」。加藤さんは、小さいお店にとっては、お客様に信頼されることが財産だと言っていたという。

火星の庭の開業と合わせるかのように、加藤さんの活動も忙しさを増していった。仙台市市民活動サポートセンターの開設、ＮＰＯの先達として講演や研修会に全国を飛び回る日々が続いていた。多忙な時間を縫って、今読んでいる本の話しや仕事や活動のことを気の向くままに話してもらおうと、「加藤哲夫のブックトークてっちゃん今なに読んでるの？」が火星の庭で始まった。２００７年から２００８年のことだった。無類の読書家、自身を活字中毒と自称する加藤さんの話は、社会情勢や背景も解説さ

前野久美子（まえの・くみこ）さん

1969年福島県郡山市生まれ。調理師資格を持ち、エコロジーショップ「ぐりん・ぴいす」勤務などを経て、2000年に古書店と喫茶が融合した「book cafe 火星の庭」を開店。仙台の文化の発信地として様々な企画を仕掛けている。
座右の銘：「快食快眠」

れ、興味深いものだった。「何か予感がしたのかな。今、話を聞いておかなくてはと思ったの」と前野さん。このあと加藤さんは、末期の癌と診断され、東日本大震災が発災した2011年の夏、病に倒れた。

震災を経て、仙台で暮らし続ける

震災後の2012年と翌年の2回、前野さんは4人の仲間と音楽フェス「おとのわ」を開催した。仙台市内にあるライブホールRensa（レンサ）を会場に、子育て中の母親たちも、子連れで気軽に参加もできるイベント。ライブ、マルシェ、ワークショップと多彩なプログラムを用意し、NPOや市民活動団体などの必要な情報が得られるよう工夫した。各回とも500人を超す人々でたいへんな賑わいとなった。震災が起きて、原発や放射能のことなど不安な時期、自由に語り合える場が必要だった。「小さい声や小さな草の根活動を一堂に集めて見せることで、不安なのは自分一人ではないと気づき、元気がでると思ったんです」

現実から逃げるのではなく、実状を克服していく活動の中にも楽しいことがあると示したかった。

今でも様々な問題に直面し判断に迷うとき、「哲夫さんだったらどうするだろう?」と自問自答する毎日。「哲夫さんがいなくなって、心細いけど、頑張っていこうと思う」と前野さん。これからも仙台の街で、火星の庭を拠点に活動を続けていこうと覚悟を決めている。

『加藤哲夫のブックトーク　てっちゃん今なによんでいるの』（写真上2冊）ほか、加藤哲夫さんに関係する書籍。

「Diary（ダイアリー）」は、宮城県内の催しが一覧できるフリーペーパー。

店内の古書は、アートや思想、文学や絵本、カルチャーなどが中心。

book cafe 火星の庭
宮城県仙台市青葉区本町 1-14-30 Tel 022-716-5335
http://www.kaseinoniwa.com/

インタビューを終えて

いつも明るく元気なイメージの前野さんですが、これまでの様々なご経験を、今の活動にぶつけているのだと、初めて知ることができました。加藤さんの一言に押され、理想の場所や活動を実際に作り出す行動力。震災後は現実から逃げず、困難を克服する中に楽しさを見出す姿に、前野さんの〝強さ〟を感じました。
（2014.12.22 取材　葛西淳子・高尾詩乃）

Interview

○三浦隆弘さん
農家（宮城県名取市）

世の中の不便さを、農という立場からどう解決していくか。

新しい仙台の冬の風物詩ともなった、「せり鍋」。この「せり鍋」が生まれるきっかけとなったのが、三浦隆弘さんの作る「せり」だ。せり固有の何ともいえない甘さは、三浦さんのこだわりである無農薬栽培の土壌作りからきているのだそうで、せり鍋愛好家にとって、特別な存在となっている。

三浦さんは農業と並行して、「なとり農と自然のがっこう」を主宰している。これは四季折々の農村自然体験プログラムとして、季節ごとの田・畑での作業だけではなく、収穫したものを調理して食べたり、消費者に販売したりするプログラムを子どもたちに提供している。ほかにも、環境保全活動を行う環境NGO「みやぎ・環境とくらし・ネットワーク（MELON）」の理事を務めている。

専業農家をしながらも、市民活動をし続ける三浦さん。そこには、「世の中の不便さを、農という立場からどう解決していくか」という、一貫した想いが貫かれている。

読書好きの野球少年

三浦さんは、名取市農家の7代目として生まれた。小学4年生の時に父親を亡くし「長男としてしっかりしなければならない」という思いから、常に体裁を考える少年だった。そんな三

浦さんの楽しみは「読書」と「野球」。学校の図書室だけでは足りず、名取市の図書館へ通っていたそうで「読書しているときには現実逃避して、翼を大きく羽ばたかすことができたんです」と当時を思い返して語る。また、野球を通しての地域の大人たちとの出会いから、多くのことを学んだ。

そんな三浦さんの意識が大きく変わったのは、高校時代に参加した「やまがた林間学校（主催JR東日本）」だった。鳥海山を作家夢枕獏氏と登るこの企画は、三浦さんに「リアルの世の中のほうが面白い」ことを気づかせた。これまでの読書の知識と現実が、つながった瞬間だった。

市民活動との出会い

高校を卒業し、地元の宮城県農業短期大学に進学した。しかし大学生活の中では、もんもんとしていたのだそうだ。その時手に取ったのが、加藤さんの編集する『センダードマップ』だった。「冊子に掲載されている『エコロジー事業研究会』に入れてもらえないか手紙を書いたんです。だけど会は、すでになくなっていると直接返事を頂戴しました」。しかしこれをきっかけに、加藤さんが運営するエコロジーショップ「ぐりん・ぴいす」に通うようになり、そこで刊行されるミニコミ誌や、店に並べられたいろいろなチラシを手に取ったことが多くの出会いにつながった。こうして、学生時代から市民活動に関わることになっていった。

「当時は市民活動の情報集まる場所といったら、そこしかなかったんですよね。哲夫さん自身とはあまりお店でお会いすることもありませんでしたけど、哲夫さんの周りに集まる素敵な大人たちに出会い、多くの刺激を頂きました」と三浦さんは語る。

農家に育ち、人一倍環境に対する意識が高かった三浦さんは、そのうち、環境関係の市民活動に積極的に参加し始めた。「MELONとの出会いもこのころですね。ほかにも、農家と農地をつなぐアースワークス研究会、田園環境センター（現まちづくり政策フォーラム）など。とにかく興味のあることであれば、セミナーでも審議会の傍聴でも、積極的に顔を出していました」。

大人が「こうやって世の中を動かしているんだ」と知ることが何よりも楽しかったそうで、「今の自分を育ててくれたのは、『仙台のまち』だと感謝しています」と語る。

全員が「食」の当事者であること

無農薬栽培や自然環境教育を実践している三浦さんだが、すぐそこにたどり着いたわけではない。「当時、勢いのある若者だと言ってくれる方もいて」。MELONの活動の一環で、国際会議WSSD（持続可能な開発に関する世界首脳会議／ヨハネスブルグ・サミット）に参加した。その国際大会で、発表された子どもたちに対する環境教育の取り組みに大きな影響を受け、帰国後、食育についても深掘りをしていきました。「その経験が、今の『なとり農と自然のがっこう』の取り組みに活かされています」。

何よりも、加藤さんのセミナーで学んだ「当事者意識」「動機付けをどう提案していくか」という視点が、三浦さんのポリシーに大きな影響を与えたという。「全員が食の当事者、ただ作るだけの生産者対食べるだけの消費者という対立の構図ではなく、ともに当事者として関わっていけるための動機づけの仕組みづくりを考え続けていきたい。世の中の不便を、『農』という立場でどう解決していけるのか。それを、言葉で批評・評論するのではなく自ら飛び込む、行動で示し消費者の皆さんと一緒に取り組んでいけるように。いろいろなやり方で世の中にプロレスを仕掛け続けていきたい。そう思っているんです」。

震災、そして未来へ

東日本大震災の影響は、なんといっても「放射線量」の問題だった。「無農薬で安心安全な食材にこだわってきた自分ですし、そこにはとことんこだわりました」。

三浦さんは、震災後、自分の作物の放射能検査を行い、ブログで生データを全て公開。食の選択を消費者に委ねることにした。

そして今、震災直後の放射能に対する心配も落ち着き、「せり鍋」のブームが到来した。「営業や広告は一切しませんでした。せり鍋を食べた方が、ご自身のブログやSNSで投稿してくれて。口コミで評判が広がっていったんです」と三浦さん。マスコミからの取材オファーも後を絶たないが、今はなるべく断っている。

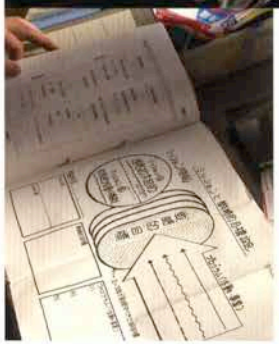
三浦隆弘（みうら・たかひろ）さん

1979年宮城県名取市の農家の長男に生まれる。宮城県農業短期大学農業学科卒業。せり、みょうがたけなどの野菜と米の専業農家。環境問題に興味を持ち「みやぎ・環境とくらし・ネットワーク（MELON）」理事や「なとり農と自然のがっこう」を主宰する。座右の銘：「それでも人生にイエスと言う」（V．E．フランクル）

「我が家のせり田は 30 ヘクタールですから、収穫量には限りがあります。ありがたいことに、今年は、生産量を超える注文を頂戴しましたが、新規の注文はお断りさせていただいているんです」。三浦さんは「適正規模の生産」にこだわる。それは、これまで支えてきてくれた方々を大事にしていくというマインドはもちろん、震災後の放射能問題のことも一つの要因だと語る。「増産してしまうと、万が一の場合の連絡が取れる範囲を超えてしまいますから」。そこからは、安心安全な食材の生産へのこだわりと、消費者を大切にする熱いマインドが伝わってくる。

「代替不可能な存在であり続けたいんですよね。自分にしかできない、あいつじゃないとダメだといわれ続けることが大事なんじゃないかと。そして、愛着を持つ生産者が伝え続け、愛好者に生産物を購入し支えてもらう。それが共存関係を生み出していくんだと思います」という三浦さん。

「農」を通したいろいろな取り組みから、一人ひとりが当事者として社会の課題解決をしていくように、そして、常に実践者でありつづけようとする三浦さん。加藤さんの「自然と向き合っていく姿勢」、「当事者意識」、そして「現場感」を大切にする姿勢が、進化しながら引き継がれている。



加藤さんが手書きで配布した資料を見つつ。「時折、悩んだときにはこうやって見返したりしているんです」。

取材時旬だった仙台せり。根っこまで甘いせりの出荷のためには、手作業で丁寧に根っこの部分を洗っています。

インタビューを終えて

取材後お願いして撮影させていただいたファイティングポーズ。一見ワイルドにもみえる風貌の三浦さんであるが、現在定番となったせり鍋について、話題性があっても「思い入れ、愛がないと続かない」と述べていたように、優しさあふれる人柄が印象的であった。せり田というリングの上で今日も社会に挑み続ける三浦さん。これからは若き挑戦者が三浦さんの門を叩き続けるのであろう。

(2014.12.14 取材　佐々木秀之・中西百合)

Interview

○大泉大介 さん
河北新報社記者（宮城県仙台市）

種を蒔く人を探し やがて自ら種を蒔く。

「記者を志したのは中学生の頃」という大泉さん。きっかけを伺うと映画「ローマの休日」の話題に。主演のオードリーヘップバーン扮するアン王女と恋に落ちるグレゴリー・ペック演じる新聞記者の話。「新聞記者って、王女に会えるんだ！」と憧れを抱いたことを、ちょっと瞳をキラキラさせながら告白してくれた。さらに、大泉少年が「新聞記者、やりたいんだー」とお父さんに話した時には、「なら、配達からやれ！」と軽くあしらわれたことも。

知の巨人と出合う

河北新報社に入社して4年目の1999年春。大泉さんは仙台市青葉区にある本社の特報部に配属された。特報部とは、いわゆる記者クラブに属さない記者の集まり。ネタは待っていてもやってこない。「なんか面白いこととか、変わったことないかなと思うと、サポセンに行きましたよ」。〝サポセン〟の呼び名で親しまれている「仙台市市民活動サポートセンター」はその年の6月に開館した。仙台市が市民協働元年を掲げ、全国初の公設市民営の市民活動支援施設として設置し話題になっていた。当時は、青葉区本町の五叉路の一角にあった4階建の建物。そこには、チラシやニュースレターが並んでいて、いろんな研修や勉強会やイベントの会

場になっていた。「われわれ記者からすると、サポセンに行けば何かがある状況になり、常に市民活動や市井の人たちの取り組みや動きが見える化された見本市のようだった」。

その管理運営団体の代表が、加藤哲夫さんであった。「すごい施設をつくった大人物という印象が強かった」と大泉さん。季節ごとに加藤さんを訪ねては「地元紙としてどう書けばいいか。地方新聞社のあるべき姿などについて意見交換していた」という。さらに、加藤さんの印象を、「正論を全うに言える人、知の巨人。だけど話すことは、雲の上で分かりにくいかというとそうではなくて、極めて分かりやすかった。もう少し頭の中を分解してみたかった」と続けた。

加藤さんが話す分かりやすさは、「分け方がうまかったんですよ。哲夫さんは、それが巧みだった。説明の時に用いる紙芝居のような自前の手書きフリップ。図式化できるってことは『分けられている』こと。混然一体となっているものは、図式化できないですから、哲夫さんはフローで見せてくれて分かりやすかった」。

エピソードⅠ「歯ブラシ」

特報部時代に大泉さんは、3カ月間ホームレスの取材をした。「カメラマンが仙台のホームレスの姿を撮りたいと言い出して、それなら、『大泉ついて行け！』と言われてね」。夜なカメラマンと駅や公園や橋の下に行っては「ちょっといいですか」、「何故にここにいるんですか」と声をかけていたそうだ。「取材に来てくれ」と言われて行くのとは勝手が違った。

ある日大泉さんが買った『ビッグイシュー』を眺めていると寄付者の中に〝加藤哲夫〟の名前を見つけた。「哲夫さんは、言うだけじゃなくてやる人なんだと。あの時の刺激は大きかった」。そして加藤さんは、せんだい・みやぎNPOセンターで年間100件以上、講演や研修の講師を請け各地に出かけていた。出張先のビジネスホテルにある備え付けの歯ブラシや髭剃りを未使用のまま持ち帰り、まとめては仙台で活動しているホームレス支援団体に贈っていたのだ。

だから、今でも大泉さんは出張先のでホテルで歯ブラシを見るたびに「あー、哲夫さん」と思い出す。

エピソードⅡ「哲平くん」

大泉さんが、夕刊の「青春どきゅめんと」という若者参加の紙面を担当していた頃、参加者の一人に当時高校生だった加藤哲平くんがいた。その時は哲平くんが加藤さんの息子とは知らずに接していた。

それから何年か過ぎ、哲平くんが就職し、結婚した。「哲夫さんは、すごく喜んでいた。哲

平くんが廃棄物の処理会社に勤めてトラックに乗っていることを『俺、あいつ立派だと思う』と誇らしく話していた」。大泉さんは、加藤さんの印象をまた新たにした。「世の中を変えるとかいう社会的なポジションにいる人だから、自分の息子にもそういう論を身に着けさせることを望むのかなって、勝手に思っていたら、大違いだった。『あの職場がなかったら、世の中回らないだろう』って感覚で自分の息子に正直で、親として強制もせず、『若くして家庭を築き、かみさんもいい子なんだぞ』って息子の選択をリスペクトしていたんですよね」。大泉さんは、加藤さんは、言っていることとやっていることが首尾一貫している実践者だと思った。

大泉さんは、哲夫さんが亡くなってからその話を哲平くんに打ち明けた。「そういう話は聞いたことがなく、親がどう思っていたかなんて初めて聞きました」と哲平くんは嬉しそうに語っていたそうだ。

小さな実践の積み重ね

大泉さんが仕事として、加藤さんと大きく拘わったのが2004年秋の夕刊連載「公・私（おおやけ／わたくし）」であった。パブリックとプライベート領域の問題について。加藤さんに、構想段階から取材のコンテンツづくりのアドバイスをもらった。「例えば、電車内で化粧するとか、花見の場所取りとか、一番話題にしたのは図書館の本が破られたこと。みんなのものを私（わたくし）化、私物化する風潮について」。連載のまとめとして座談会にも出てもらった。「世の中がうまく機能し成熟していくためには、相手を思ったりコミュニケーションしたりすることが、社会をつくっていく、という話を哲夫さんとしましたね」。

加藤さんがよく言っていた。「例えば、公園の花見の場所取りがトラブルの元だから、役所が出てきて仕切れというのは、全然ナンセンス。行政（おかみ）がルールを決めるのは違う。おかみが決めたから従えっていうのではない。その場で人と人が向き合って対話してこそ、世の中は育まれるし、その先に文化が生まれる」。大泉さんは、取材を通してそういう感覚を磨いていった。

「僕も取材者として、小さなことをコツコツやっている人、その人のやっていることの意味をちゃんと伝え、書いていこう、と哲夫さんから教わった点は大きい。彼はそれを強いた訳でも、命令した訳でも、組織化した訳でもない。でも僕の記事が何人かの気持ちに留まり、脳裏の片隅にあることが何年か後に何かのアク

大泉大介（おおいずみ・だいすけ）さん

1971年宮城県大崎市生まれ。立命館大学卒。1995年河北新報社に記者として勤務。2011年震災後南三陸町の取材を担当。同年6月にインターネット部門へ配属。2012年から大学生向けプロジェクト「記者と駆けるインターン」を担当し、若い世代の情報発信者を育てることにも尽力している。座右の銘：「つながりは力」

ションにつながる。種を蒔くように。だから、目先の成果や効果よりも、哲夫さんは小さなことの積み重ねにあるということを一貫して言っていたし実践していた。意図的に、確信犯的にね」。

若い世代への種蒔き

2011年の東日本大震災を機に「地元新聞社は、報道のスタイルについて大きく考えさせられた」と大泉さん。「マスメディアがマスで何かをしていくのは本流だけど、一方で、小さな実践や地域内のアクションも大事。その種を蒔くことは、もっと大事だと思っている。2012年夏から取り組んでいる大学生を対象とした〝記者と駆けるインターン〟は若い世代と地元新聞社がどうつながれるかを模索している」と語る。

「3年間で208人の学生記者インターンと確かな時間を共有した手応えがあった。その先にしか未来はない。哲夫さんの発想から授かったものもそうだし、震災で突きつけられた課題もそうだし、なんかそこには道筋があるような気がする」と大泉さん。「種は蒔いた。蒔いた種に何年後かに再会した時、そいつはちゃんとその場で根を張って、芽を出して別のステージに行っている。そこには集う仲間がいたり、家族がいたりする。その物事の考え方とか思想とか、受け継がれているのは、けして種は種のままではなく、そこでまたDNAを受け継いで広めてくれると確信している」。いろんな場面で化学変化を生み出している学生たちとガチンコで向き合い、大泉さんはまた種を蒔く。

2004年秋の夕刊連載「公・私」でおこなわれた座談会紙面。左下に加藤さん。「場を仕切るのは人と人」の小見出しが写る。

高校生の時、小論文の入試対策で先生から真っ赤になって戻ってくる原稿を手にした時、「自分の言いたいことの伝わらなさ」に驚きを感じ、一方で、直していくにつれ「伝わる面白さ」も体感したと語る大泉さん。

インタビューを終えて

大泉さんが、今後地域の中で何をすべきか、はっきり認識していることに改めて驚かされました。常識や職業の枠にとらわれすぎず、自分ならどのように考え行動するか、常に問いかけているようです。様々なものから“種”を成長させるために、自分の軸を確かなものにしていきたいと思いました。
(2014.12.1 取材　青木ユカリ・高尾詩乃)

Interview

○小野寺美厚さん
特定非営利活動法人
ネットワークオレンジ代表
（宮城県気仙沼市）

ないものは、自分たちで生みだしていく。

気仙沼市三日町。ここに不思議な場所がある。入口は駄菓子屋さん。中に入ると、そこらここらにアート作品が並んでいる。さらに奥に進むと、複数の人がホワイトボードの前でなにやら話し合いをしている。放課後の時間になると、子どもたちもやってきて楽しそうな声が響きわたるという。大人から子どもまで、実に様々な人たちが集まってくるところ…。

この不思議な場所をゼロから創り上げてきた人がいる。特定非営利活動法人ネットワークオレンジ（以下、オレンジ）代表の小野寺美厚さんである。

オレンジは、「障がいのある人もない人も、みんながまちづくりの主役！」というスローガンを掲げ、福祉事業とまちづくり事業を実施。東日本大震災後は、オレンジの立ち上げの過程で身につけたノウハウをもとに、起業家育成も行い、4年間で100名を超す人材を育成している。

障がいのある人も、ない人も

小野寺さんの活動のきっかけは、障がいを持った双子の息子さんの誕生だった。彼らが健やかに生きる環境をつくるために、福祉団体の事務局など様々な現場で経験的に学んで行った。そのなかで既存の団体は、活動資金を外部に依存することが多いことを知った小野寺さん。「自分たちで資金を生みだしていく方法は

ないか。もし自分が団体の代表ならば、行政自体にお金がなくなった時、この子たちと野垂れ死にするのはいやだ」と自問自答していた。

そこで、2002年、小野寺さんが次のステップとして挑戦したのがゼロから活動資金を作ることだった。フリーマーケットを開催し、その活動が口コミで徐々に広がり、資金は100万円ほどに達した。そんな時、商店街のまちづくり団体から「築50年以上の空き店舗があるので、そこで一緒に事業をしませんか」と誘いを受けた。家賃は月1万円。5坪でトイレ・水道無し、人通りもなく高齢化した地域だった。実際に店舗を見て「懐かしいイメージを活かしてコミュニティの場を作ろう!」とひらめき、駄菓子屋をスタートさせた。すると地元のお年寄りから小学生まで、人が途切れることなく訪れ、多様な人々が集う場となった。

次に「この環境の中に障がいのある人たちが参加するように、少しずつ接点を作って行こう」と、まず自分の子どもをお店に連れていった。しだいに口コミで広がり、障がい児を持つ親から「うちの子もこういう環境で過ごさせたい」という声が寄せられた。その当時はボランティアもいなく、実質小野寺さん一人で運営していたが、ニーズに応え、障がい児の日中預かりを一人1000円で始めてしまったそうだ。

その後駄菓子屋は、地元の商店や団体、専門学校の学生さんたちが協力。最終的には地域の方がスタッフのような形で支えてくれた。「みんなに支えられた『オレンジ』となっていったんです」と、小野寺さん。

みやぎNPO夢ファンドへのチャレンジ

2007年、気仙沼市役所職員から「登竜門的にチャレンジしてみませんか?」と紹介されたのが「みやぎNPO夢ファンド」だった。初めての事業計画・予算書づくりに苦戦しながら申請。プレゼンテーションの機会を得た。「審査員だった加藤哲夫さんは、助成金に頼らず、独自で開拓してきたことを高く評価してくださり、『面白い!』と言ってくれました」。そして、ついに年間100万円、3年間の助成が決定。2008年に「ネットワークオレンジ」として法人を設立し、スタッフを雇用し、福祉サービスの事業化を実現させた。

「これを機に、気仙沼から加藤先生の経営相談に毎月通いました」小野寺さんが相談したのは、スタッフの雇用や法人運営のこと。「加藤さんからは無償ではなく、価値あることを社会的なサービスとして価格を決定すべき」などのアドバイスなどを受けた。「ちょっと心配になったらすぐ仙台に行くという感じ。

小野寺美厚（おのでら・みこ）さん

1969年宮城県気仙沼市生まれ。双子の息子の障がいをきっかけに、知的障がい者の社会参加支援などの福祉活動を始める。2008年「特定非営利活動法人ネットワークオレンジ」を設立。代表理事を務め、女性社会起業家としても注目を集める。
座右の銘：「一期一会」

今思うと、あの時間は本当に貴重でした」。

そして、小野寺さんは加藤さんの推薦によって、アメリカン・エキスプレスリーダーシップ・アカデミー「NPOの次世代リーダー育成プログラム」に参加することになった。これは、加藤さんが尊敬する学者の一人である米倉誠一郎氏（一橋大学イノベーション研究センター所長）が総監修するプログラムだった。加藤さんの「大きな学びを成果にしてくるオレンジが楽しみだ。もっと世に送り出したい」という言葉通り、小野寺さんはここから新たな人脈や知識を得て、大きく羽ばたいていった。

東日本大震災を経て

プログラムが終わった2010年1月、次に飛び込んできたのが東北ニュービジネス大賞「ソーシャル・アントレプレナー大賞」受賞のニュースだった。そして、これが縁で2011年「社会イノベーター公志園」大会の決勝に出場し、グランプリに次ぐ審査員特別賞を受賞した。実は、この出場も加藤さんの推薦だった。

その直後の3月11日に東日本大震災が発生。気仙沼市は甚大な地震・津波被害を受けた。しかし、オレンジではスタッフも利用者も全員無事だった。発災直後の混乱の中、小野寺さんは「生き残った使命として、この環境下でできる最大限のことを生みださなくては。この受賞をどう生かしたらいいか」と気持ちを切り替えた。雇用を守るため、新しい一歩を踏み出すため、ふるさと気仙沼のため。オレンジは発災後12日目で活動を再開した。今まで培った人脈をフルに生かした物資支援や心のケア活動を、障がいを持つ人も持たない人も一緒に行った。

また、海外の団体とのつながりも新たに生まれた。ドイツのNPOとの協働事業でアーティストを招いて月に1回から2回子どもたち向けにワークショップを今も継続して実施している。

2011年11月からはフランスの有名企業と組んで「東北マルシェ」事業に取り組み、被災した商店街の方やこれから事業を立ち上げようとしている人向けの実践型ビジネススクールを立ち上げた。「私のビジョンの中で、震災がなくても実施する予定だった事業でした。かつて私たちがフリーマーケットでノウハウを築き上げたものをマルシェの中で実践していただき、自分の店作りに役立ててもらうというものです。気仙沼だけでなく、陸前高田、南三陸、仙台、石巻、福島から人が集まり、実際に起業された方もいます」現在は既存企業の方も参加し、商品開発等を学んでいる。

「豊かさ」を提供できる組織に

震災後にフランスで視察をした小野寺さんは「今あるこの環境の中で豊かに生活するヒント

を得た」と言う。「いろんな問題を見ないふりして生きていくのではなく、被災地でも『豊かさ』というものをきちんと世の中に伝えていける環境を整えていきたいと考えています」。

そのために、法人の理事は気仙沼の人だけでなく仙台や東京から、医学博士、社労士、会計士などのスペシャリストが参画し、将来必要なノウハウを提供してもらいながら事業を展開している。「自分たちで稼いで、『豊かさ』を提供できるタフな組織でありたいんです」。

教わった知恵を伝え続ける

小野寺さんは自らの活動を通じて感じていることがある。それは「みなさん『志』はあっても『ノウハウ』がない」ということだ。小野寺さんは「ネットワークオレンジ・モデル」を広げていきたいと考えている。「事業所のリーダーとなる人を育成し、事業所の周りがどんどん明るくなっていくことを実践したい。学びがあって、療育があって、最終的には地域経済を動かしていくという仕組みがオレンジにはある。これまでの私の経験を、志を持つ人にどんどん教えていきたい。実は、これは加藤さんのやり方なんです。私は先生から教わったことを次の世代に残さなくてはいけない。教わったことを大事に育て、先生が伝えたかったことを検証していくのが今後の私の作業です。加藤先生と出会えて、本当に勇気と自信をいただきました」。

小野寺さんには、確実に未来のビジョンが見えている。

東日本大震災後、多くの支援を受けたネットワークオレンジ。これらのメッセージは、今でも活動の原動力になっている。

震災後に始まったアート活動「オレンジキャンバス」の作品がたくさん飾られている。一部は商品化し、被災した方の貴重な収入源にもなった。

特定非営利活動法人 ネットワークオレンジ
宮城県気仙沼市三日町2－2－15
Tei0226-22-6723

インタビューを終えて

小野寺さんの「この子たちの未来をつくる活動を始めよう!」という決意のきっかけとなったのが TUBE の「Keep on Sailin'」という曲だったそうです。歌詞を見ると、小野寺さんの考え方や行動と重なっていて本当にビックリ。起業家精神とエネルギーがあふれる小野寺さん。これからも活動は気仙沼から全国へ全世界へと伝わり、社会変革の同志を増やしていくことでしょう。

(2014.11.18 取材 田中聡子・遠藤智栄・方芳)

Interview

○玉川 啓 さん　福島県職員（福島県福島市）
○小林直樹 さん　浪江町職員（福島県浪江町）

本当の意味での「協働」とは何か、東日本大震災の経験から想う。

２０１１年３月11日の東日本大震災から、いまだに住民が戻ることのできないエリアがある。その一つが、福島第一原発から20キロ圏内にある、福島県双葉郡浪江町だ。福島県庁の玉川啓さんと、浪江町役場の小林直樹さんは、全町避難の混乱期の中で、同町の復興ビジョン策定のため、復興検討委員会での度重なる話し合いと、住民アンケートを行い、まさに住民と共に創る復興ビジョンを完成させた。

ビジョンの策定にあたっては「専門家が関わっていくら立派なビジョンを策定したとしても、それが役場からの押しつけであったら意味がない。住民と一緒につくっていく、そのプロセスこそが大事」と2人とも口をそろえて言う。なぜそこまで言い切れるのか。そこには、加藤哲夫さんとの深いつながりがあった。

本当の意味での「協働」とは

新築の家屋の周りに、ぼうぼうとなった雑草。「人の住まなくなっている町がどうなるのか。ご自分の目で見て感じていただければ…」。小林さんが、全国からの被災地視察に対応する時に必ず説明するのが、町民と共につくった「復興ビジョン」だ。

この「復興ビジョン」策定に関わった福島県職員の玉川さんが、浪江町に出向となったのは、

実は震災前の2010年のこと。同町は新町長の方針により、「協働のまちづくり」の実施のための準備に入った。しかし、その知見を持つ職員がいなかったことから、白羽の矢が立ったのが、当時福島県庁にいた玉川さんだった。

もともと、地域の方々の役に立つための仕事がしたくて、県庁職員となったという玉川さんは「当時、全国的に取り組まれていた『協働』のほとんどが、加藤さんから学んだ私からは、行政の仕事を民間にアウトソーシングするだけのものに見えました。行政の仕事を住民に分担するだけが『協働』ではなく、町づくりのあり方から住民と共に考え、それぞれの得意分野を生かして、力をあわせて町をつくっていくという事例は少なかった。そんな中、浪江町の掲げた『協働』をよく読み解くと、まさにその方向を模索しているのが分かりました。だからお話を頂戴した時は、嬉しかったです。自分に与えられた役割が果たせる機会が来たって」と語る。

本当の意味での住民主体の協働を模索したい。そこで玉川さんは、以前より親交のあった加藤さんに助言を求めた。

出会いはワークショップ

玉川さんと加藤さんの初めての出会いは、阪神淡路大震災の翌年のこと。まちづくりに関わっていた知人から紹介された。

その後、加藤さんが主催した、当時としては全国でも数少ないワークショップ研修会に参加。「志を持って仕事に就いた中で、自分を見失い、悩みが多い時期でした。そんな中、自分の誕生日と同日のイベント。そんな偶然に小さな希望を感じて参加したんです」と玉川さん。この研修会がきっかけで、加藤さんとの交流が始まった。そこで触れた「公共」や「地域」に対する考え方は、その後の彼にとって多くの影響を与え続けている。

いざ「協働のまちづくり」へ

「忘れもしません。あれは、奇しくも加藤さんがお亡くなりになる、ちょうど1年前の2010年8月26日のことでした」と、玉川さんは感慨深げに語る。

その日は、浪江町の「協働のまちづくり」に向けた職員研修会だった。朝、体調を崩した加藤さんだが、どうしても自分が行くといってやってきた。「研修は一日の予定だったのですが、午前中は何とか休んでもらって、午後、壇上にあがってくださったんです」。

そこまでするその背景には、福島県出身である加藤さんの、ふるさとに貢献したいという想いと、頼ってくれた古き良き仲間の玉川さんからの期待に応えたいという想い。そして、浪江町が目指していたまちづくりが、加藤さんの描

く本質的な住民自治であると捉えたことがあったのではないかと、玉川さんはふりかえる。

「この日の講義は、これまで聞いた哲夫さんの話とは全く違うものを感じました。とにかく強烈なインパクトで、熟成された話は、まさに集大成のように受け取れました」。

大震災、そして原発という試練

職員や住民向けの協働研修を、1年かけて終了し、「協働のまちづくり」はこれから本番という新年度を迎える直前、あの東日本大震災が発生。「とにかく震災の復旧に無我夢中で、もはや協働なんて考えている場合じゃありませんでした」。そんな、玉川さんの意識が大きく変わった出来事があった。

発災から2週間経ち、一次的に避難した場所から二次避難所へと、住民を移動させる準備が進んでいたある日のこと。ある避難所で「我々はここを動かない。全員移動には反対する。とにかく町長を呼べ」との騒ぎになり、玉川さんが役場を代表し単身で説明することになったのだ。

出向いた避難所の大広間には、100人を超す住民が待っていた。「町の今後はどうなるんだ」、「避難所はどうなるんだ」…。不安が渦巻く会場。食い入るようなまなざしを目の前にして、玉川さんは腹をくくるしかなかったという。

「無理やり移動させたいわけではない。ただ、雑魚寝状態の中で2週間。このままでは、住民の命を守る私たちとしては、切なすぎるのです。少しでも一人ひとりが、早く布団で寝られるようになって欲しいんです」。公務員という殻を破り、自分の想いとして、一言ひとこと絞り出していく中で、会場の空気が徐々に変わっていったという。

「これが私にいえる、できる精一杯なのです。お許しください」。1時間以上経過し、そんな言葉で終わりを告げた後に待っていたのは、最初は役場を敵視していたはずの、町民一人ひとりからの満場の拍手だった。玉川さんは、町民の大きな拍手に暖かさを感じ、多くの人前で涙した。「正直、電池が切れかかっていたんです。自分たちだけが頑張っている、という錯覚のなか、追いつめられていましたが、そうじゃない。自分たちは、この人たちに実は支えられているんだと気づいたのです」。この体験は、その後の復興における玉川さんの活動の原動力になった。

もう一つ、活動の原動力になったエピソードがある。「国、東電…どこにいっても話を聞い

玉川啓（たまがわ・あきら）さん

1971年福島県福島市に生まれる。1993年福島県庁に入職。2010年浪江町役場に出向。震災前の協働のまちづくりに携わった後、被災後は避難対応、復興ビジョンの策定にかかわる。2013年、3年間の浪江勤務を終え県庁へ復職。
座右の銘：「人生の扉は他人が開く」

てくれない。役場に見放されたら、どうしたらいいのですか」。そんな、一人の女性の切々とした想いに、「役場は、住民にとって最後の拠り所だったのだ。本当に重い。だからこそ逃げてはいけない」と強く思ったのだそうだ。

そんな出来事のあった2011年8月26日、加藤さんの逝去。「訃報を聞いたとき、ザーと音を立てて喪失感が襲ってきました。こんな時こそ、哲夫さんに相談したかったのに」。玉川さんにとって、加藤さんは本当に困った時に頼れる、兄のような、精神的支柱だった。

大きな喪失感の中、玉川さんは「加藤哲夫のDNAは引き継がなければならない」と、残されたものの「使命」を感じた。

住民も役場の職員も、揺らぐ心

2011年6月。全町避難の混乱にある中、復興ビジョンを策定するにあたって、町役場は全職員を対象とする職員ワークショップを実施した。主催したのは、役場の行政運営班。玉川さんは運営班のリーダーだった。

当時役場機能は二本松市に避難し、復興ビジョンどころか、目の前の課題も山積み状態。そんな中で職員対象に企画したワークショップには、所属に関係なく、若手も多く参加してもらった。震災後、避難所運営や義援金の配分に携わっていた小林さんも、その時のメンバーの一人だった。

「浪江に帰る。帰らない。当時の住民は2項対立で揺れていましたし、マスコミもそこを連日報道していました。役場の中の議論も、結局はそこにいきつく。自身も不安を抱える中で、ワークショップでも、どうしたらいいか分からない、そういう議論が続いたんです」。

行政も住民も閉塞感が漂う中、それでも職員を集めて話せる場ができたということは「辛い中にあっても、未来の話をする時期がきている」と、玉川さんは感じたという。

受け継がれる「協働のマインド」

それから約4カ月後。小林さんが、玉川さんの行政運営班に配置となった。震災前から玉川さんと同じ課で働いていたが、協働事業とはまったく関わりのない担当だったという小林さんは「自分でいうのもなんですが、冷めた職員だったんですよ。だから、協働っていったい何？なんて議論に巻き込まれても、そんなに熱くはならず。理念は知っていたつもりだったのですが腑に落ちていなかったんですよ、本当は」と笑いながら語る。

そんな小林さんの心に変化が生まれたのは、復興ビジョンを策定する過程の中だった。先輩の玉川さんは、住民との対話を十分にとりながら、ビジョンの草案をつくり上げていった。小

林さんも行政運営班のスタッフとして、住民との対話による復興ビジョンの策定プロセスに入っていったが、初めはあくまで業務の一環という意識だった。

だが、一緒に取り組んでいるうちに「町に誰もいなくなってわかった。人がいて、人の営みがあってこそ町があるんだ。みんなでやらないと無理なんだ」、そう気づいた。そして「まずは住民の声をちゃんと受け止めなければ」と、玉川さんと同じように熱い発言をするようになっていた。まさに「協働のマインド」が、血肉になっていったのである。

子どもの想いが変えた、ビジョンの策定

浪江町は、2012年10月から、復興ビジョン策定のため、委員会で話し合いを重ねていった。その中で、ビジョンはどんどん内容を変えていった。「復興ビジョンというだけに、当初は、いわゆる復興まちづくり的な要素が強かった。ところが話し合いの中で、確かに10年先も必要だけれど、『ここ1～2年の生活をおさえることの重要性』を指摘する意見が増えていったんです。そこで復興ビジョンを、時間軸で策定することにしたんです」と玉川さん。議論を重ねる中で「当面どうやって暮らしていくか」を最重要視するものとなった。

その後、策定したビジョン案をパブリックコメントにかけ、住民アンケートを取った。アンケートの結果は、単なる数値として扱うのではなく、自由筆記の部分も重視した。

集計結果だけでなく、直筆のアンケートそのものに向き合う中で気づいたことがあるという。「集計した数値のみで見るのとは違う。浪江に戻りたいか、戻りたくないかを尋ねる項目では、何度も書いたり、消したりして、最終的に、片方に丸をつけた人の気持ちが伝わってきました」。また、「私には決められない」と記入した人もいた。二択の答えではなく、アンケートから住民の声をくみ取ったのである。

それでも議論は「浪江町に戻る、戻らない」という議論に終始し、委員会だけでなく、町全体が二つに割れる。そんな軋みが生まれていた。そこに変化を与えたのは、子どもたちへのアンケートであった。①今困っていること（町長へのお願い）、②大人になったときどんな町になってほしいか、この2項目を、選択式ではなく、あえて自由記載の形で尋ねた。

「にぎやかな盆踊りや裸参りのあった浪江を」「浪江は大好きな町。またそういう町をつくってほしい」…。そこにあったのは、「戻る。

小林直樹（こばやし・なおき）さん

1982年南相馬市小高に生まれる。2007年浪江町役場に入職。4年目に東日本大震災が発生。避難所運営、義援金の全町民への配分などの業務に関わった後、復興ビジョンの策定に関わる。

座右の銘：「生きる時間には限りはあるけど、生き方に限りはない」「人生を生きる意味はその意味を探すこと」

戻らない」の議論ではなく、「ふるさと浪江町」に対する、子どもたちの切なる想いだった。

「何のために議論をしているのか、議論の根本をつかれた思いでした」と玉川さん。またアンケートには、苦しんでいる大人たちへの想いもつづられていた。「両親の苦しみを何とかしてほしい」…。約1000人の子どもアンケートの結果は、生の字をそのまま冊子にして、委員会に提出し、その席上で読み上げた。すすり泣きする委員もいた。「子どもの声はだれが受け止めるのか」。小林さんは、ここから委員会の意識、そして計画そのものも、がらっと変わっていったと語る。

「どこに住んでも浪江町民」。浪江町はもちろん大切。だけど、私たちが一番大切なのは一人ひとりの皆さん。だから戻ることを第一としなくてもいいのですよというメッセージを発した。2項対立論ではない。一人ひとりの暮らしの再建、それを町の復興よりも優先した。

そして「町の復興」も、子どもたちのアンケートから生まれた、心のより所となる「ふるさとの再生」へと変化していった。

「復興」という言葉を「一人ひとりの暮らしの再建を最優先して、その上で、皆が大切にしてきたふるさとを再生させていくこと」に再定義することで、復興ビジョンの骨格はようやく固まっていった。

過去から、未来へ

玉川さんは「すべての経験はこのときのためにあったんだと思う」と語る。浪江町での震災後の動き。それは、これまでのバックグランドが、有機的に結びついて生まれたものといえるのではないか。

浪江町住民がもともと住民自治をやっていたことも、ビジョン策定の背景では機能した。「浪江町は、そもそもお金のない役場で、砂利敷きなどの簡易な補修や修繕は住民がみずからやっていたんです。そこに加えて、震災の直前に本格的な協働のまちづくりのトレーニングをやっていたことは大きかったと思います」と玉川さんは語る。

2013年、玉川さんは浪江町役場への出向を終え、福島県庁へもどり、財政課に勤務している。「戻るのは辛いことでした。今は、住民に直接役に立てる部署ではありません。でも、浪江町での経験を活かし、住民と共に頑張っていくであろう仲間たちのために、バックヤードから応援していくのが、自分だからこそ出来る役割だと思っています」。

小林さんは、玉川さんが県庁へ戻ると聞いたとき、まさに玉川さんが加藤さんの逝去をきいた時と同じ、「喪失感」を覚えたという。そして残されたものの使命感を感じ、「組織として、

役場として、玉川さんが残したこの精神は引き継がなければならない」、そう誓った。

震災前、「協働」については全く関心がなかったという小林さん。今では「何事にもプロセスを大事にしていきたい。みんなで出した答えを実現していきたい」と熱く意気込みを語る。

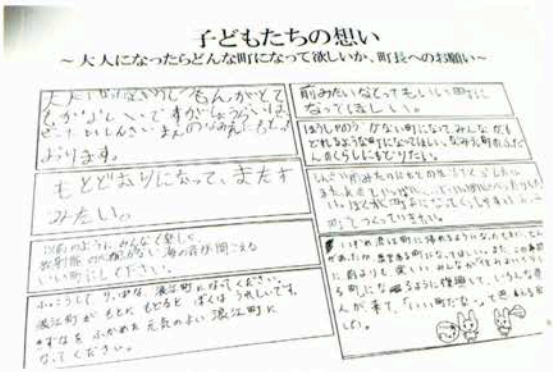
仕事としてではなく地元の青年会議所や市民活動にも自主的に参加し、以前は好きではなかったという、復興を考えるワークショップの場にも積極的に参加している。

「加藤さんが、せっかく浪江町役場に来てくれていたというのに、当時は関心も持っていなかったし、自分はお逢いする機会もなかった。亡くなったのは本当に残念。でも、今ここにいたとしたら、きっと多くのことを学ばせてもらい、すごく前向きな関わり方ができるのではと思う。これからは自分たちの出番。住民の意見を大切に、住民と共に未来を創っていきたい」。

加藤さんとは全く面識もない小林さん。でもそこには、先輩の玉川さんを経由して、間違いなく同じ想いが引き継がれている。

参考：浪江町復興ビジョンの策定について
http://www.town.namie.fukushima.jp/site/shinsai/67.html

浪江町視察の案内する小林さん。「人のいなくなった町がどうなるのか、皆さん、ぜひ自分の目で見て、感じてください」。



子どもたちの想いは、手書きのまま資料として検討会で配布。

津波で流されてきた船も、未だ撤去されないままの浪江町。時間が止まっているようです。

浪江町の被災の様子を説明する小林さん。
（浪江視察日、2014.9.10）

●取材を終えて

取材の途中で、聴き手も語り手も涙が抑えられず、胸が苦しくなる場面もありましたが、「協働」に携わる一人として、浪江町の経験から得るものは本当に大きいと感じました。本当の意味での「協働」。しっかりとかみしめて、自分自身も未来へ向けて行動していきたいと思います。
（2015.1.24 取材　中西百合・佐々木秀之）

Book Selection

加藤哲夫さんが著書や編集にかかわった数多くの書籍の中から、K-PROJECT編集委員選りすぐりの5冊

一冊開眼
NPO 最前線 成功の秘訣

みやぎ NPO 支援センターネットワーク編
発行：みやぎ NPO 支援センターネットワーク（2003.6）
（完売）

交流と研修と協働事業の実践を積み重ね 成功事例のポイントを整理し わかりやすいストーリーによって ポイントを見せる

K・PROJECT 担当の佐々木秀之さんから、「何か一冊、加藤哲夫さんに関連のある書籍を紹介していただけないでしょうか？」と相談を受けた。ちょうどその数日前にこの『一冊開眼』を見返す機会があったので、「これ、知ってる？」と聞くと「知らないですね」と返ってきた。すでに在庫はなく、閲覧用の見本も見あたらなかった。この冊子の発行は 2003 年 6 月。私がせんだい・みやぎＮＰＯセンター在職中に担当していた事業の一環で作成したものだった。加藤さんから編集のアドバイスを受けながら仕上げた思い出の一冊である。

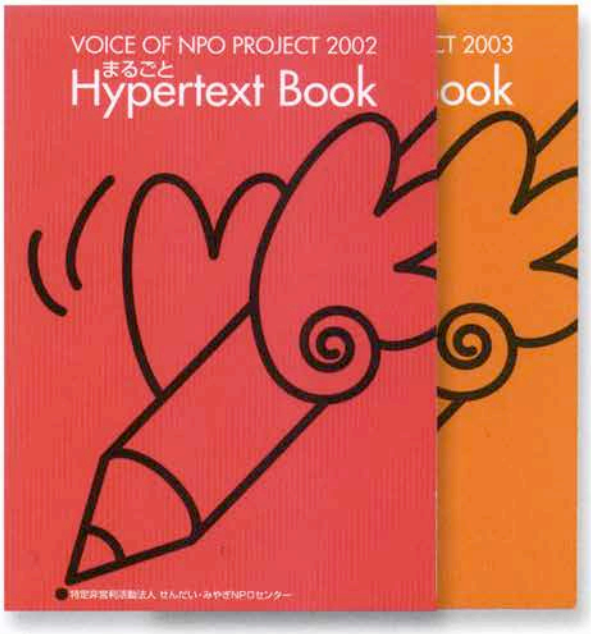
そもそもこの冊子ができる背景としては、当時の宮城県内５つの民間のＮＰＯ支援組織は、地域の市民活動団体との交流と力量形成をテーマに、2001 年にみやぎＮＰＯ支援センターネットワークを結成し、各地を巡回しながら、交流と研修と協働事業の実践を積み重ねていた。２年目の 2002 年度は、「協働のまちづくり」「地域文化と環境を生かしたまちづくり」「子育て支援」「環境まちづくり」「若者の起業」をテーマにしたゲストをお呼びし、地域の市民活動団体にも参加を呼びかけて、学びと交流の場を設けるプログラムを実施していた（助成：日本財団）。

この冊子は、その研修のゲストによるお話と、加藤さんによる解説「マネジメントの視点から」によって構成されている。「はじめに」において、「すぐれた教育プログラムはビデオの活用が効果的である」と綴られて、さらに「それには三つの要素が大事だとされている。ひとつは、成功事例が取り上げられていること。二つ目は、成功のポイントが整理されていること。三つ目は、わかりやすいストーリーによって事例とポイントを見せていること。本書はそのセオリーに従って編集されている」とある。今ならどんなプログラムができるか。「続編は？」と加藤さんのつぶやきが聞こえてくる。

（文　青木ユカリ）

VOICE OF NPO PROJECT　2002・2003
まるごと Hypertext Book

発行：特定非営利活動法人
せんだい・みやぎＮＰＯセンター（2003.6／2004.8）



共感からはじまる
ＮＰＯのための広報戦略を考える

「VOICE OF NPO PROJECT」は、外部から NPO の広報を担う人材を育て、NPO・市民活動団体とマッチングすることで広報支援をしようと企画されたプロジェクト。書くことが好き、デザインすることが好きといった、個人の得意なことを活かして社会貢献活動に参加したいという市民ライター、市民デザイナー、団体の広報担当者の３者をつなぎ、共同で団体パンフレットを制作するという試みだった。この二冊の報告書は、プロジェクトが実施された 2002 ～ 2003 年の記録である。

この事業のきっかけとなったのは、2000 年に、せんだい・みやぎ NPO センターの代表だった加藤哲夫さんが理事たちと出かけた海外視察。サンフランシスコの NPO、パブリック・メディアセンターとの出会いだった。そこはまさに、NPO のための NPO による広告代理店。NPO のことを伝える方法として、NPO を理解し応援する共感者が、第３の視点で伝える役割を果たしていることに衝撃を受けたという。

２年間にわたるプロジェクトでは、主婦、高齢者、社会人、学生など幅広い市民が、それぞれの視点で NPO の声を多くの人々に届けようと奮闘し、NPO と協力しながら大きな力を発揮した。じつは私も、市民ライターとしてこの事業に参加した一人。今もなお、市民が市民の視線で伝える面白さに味をしめ、地域コミュニティや市民活動団体の広報、編集に関するサポートを続けている。「NPO セクターの中で起きている物事を、いかに社会に的確にその意味や意義を伝えていくかということを積極的に遣って行かなくては行けない。個々の団体としても、セクターとしてもそれを考えていくという点では、一種の NPO の通信社という発想がどこかにいるかなと思っています」と加藤さんは語っている。「三者集まりゃ、文殊の広報」加藤さんの想いをなんとか受け継ぎ、実現できないかと、妄想中である。　（文　葛西淳子）

市民の日本語
NPO の可能性とコミュニケーション

著者：加藤哲夫
発行：ひつじ書房　(2002.9)
定価：695 円＋税

ことばはその人のなかから
その人の力で出てこなければ、力にならない

ある日、階数待ちエレベーターの前、加藤哲夫さんとの会話。「加藤さんは、何を目指しておられるのですか、何をやりたいのですか…」「少数の声の大きな人だけで決めない社会にしたいんだよね…」

様々な活動や事業のマネジメントをご一緒させていただいていた加藤さんに、ふと投げかけた質問だった。この本『市民の日本語』には「私がいいたいことは、《参加型》の議論の方法がもっと必要だということです」(5頁)とある。当時の私の質問への答えが詰まっている本になっている。

加藤さんが発していたことばで私がとても影響を受けたのが、この本にある「市民参加は市民の権利である」だ。私は事業を一緒に進めながら、政策形成過程に市民がいかに関わるか、発言する機会があるか、何かに気づき行動を育む機会になるかを深く考えるようになった。というのも、その現場で市民が考え、発見し、行動する主体へと変化する場面やその場づくりを何度も見て・実践してきたからだ。

そのおかげで今私は、様々な政策形成過程への市民参加をコーディネート・プランニングする仕事に関わらせていただいている。例えば、東日本大震災後の復興まちづくりの支援をする中でもそうだ。被災してしまった自分が住む地域の計画づくり、事業づくりにどう市民が参画し主体になれるか。その歩みを伴走型で支援をしながら、日々加藤さんが大切にしてきたことを振り返り実践している。

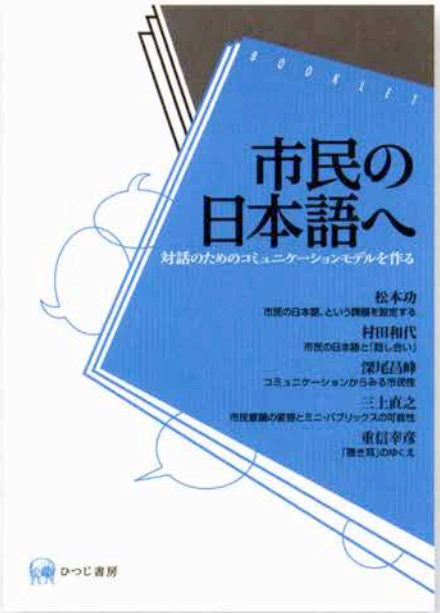
そんな加藤さんも 30 代半ばまでは、議論の場を一方的に仕切ってしまう方だったとのこと (10 頁)。様々な反発に出会い「ことばはその人のなかからその人の力で出てこなければ、力にならない」ことを気づき、ご自身のコミュニケーションや組織のつくり方を変えることにつながったという。加藤さんも私たちも、自分で気づいた時が実行する時なのだ。

(文　遠藤智栄)

市民の日本語へ
対話のためのコミュニケーションモデルを作る

執筆者
松本功［学術書出版］　市民の日本語、という課題を設定する
村田和代［社会言語学］　市民の日本語と「話し合い」
深尾昌峰［非営利組織論］　コミュニケーションからみる市民性
三上直之［環境社会学］　市民意識の変容とミニ・パブリックスの可能性
重信幸彦［民俗学］「聴き耳」のゆくえ
※［　］＝執筆者の専門領域

発行：ひつじ書房　(2015.3)
定価：1400 円＋税



5人の異なる視点から「参加型の議論の方法」を深める

2011 年「お亡くなりになる直前にお目にかかって『市民の日本語』の続編を作ろうと話していたこと…」（9頁）ひつじ書房の松本功さんが、この本の出版の経緯を語る。

「これまで議論のあまり行われてこなかった日本の文化に参加型の議論の方法を確立していく必要がある」（1頁）という課題意識に立って異なる研究領域の執筆者５名が原稿を寄せている。『市民の日本語』（2002 年）から 13 年が経過し、その後の深まりや変化を考えさせてくれる本だ。

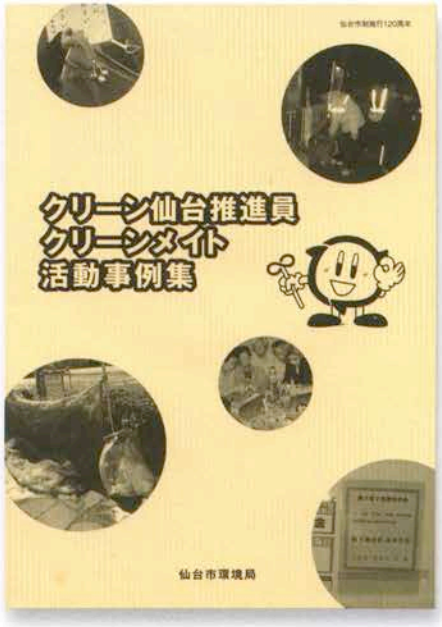
まず私が興味深いと感じたのが、NHK による「日本人の意識」調査（83 頁）だ。これは「住民の生活を脅かす公害問題」が起こった場合「静観」「依頼」「活動」の３つの選択肢から自分が取るであろう行動を一つ選んで回答するというもの。2003 年頃以降「依頼」「静観」が右肩上がりに伸び「活動」は右肩下がりになっている。この３つの選択肢が置かれた場合、例えば「…（無言）」「～して欲しい」「～しよう」など、発する日本語が異なるだろうということ。さらには「活動」は地域社会を参加型で主体的に作っていくことにつながるので、右肩下がりをどう分析したらよいかなど思索を巡らせてしまった。

そのほかにも私自身、ミニ・パブリックス（社会の縮図になる数十～数百人程度を集め、1日から数日話し合った結果を政策決定などに用いる仕組み）や討議型世論調査（じっくり考えたり、話し合ったりする要素を含む世論調査）、ライフヒストリーの聞き書き、話し合いなどについては、関心を寄せ実践に関わる機会が多々あった。その時に私が感じたのは「人は『問いかけ』があるから考える」ことだ。この「問いかけ」の日本語をいかに生み出し設定し、その際の「場づくり」をどう工夫するか。この本を読まれた皆さんとさらに深め実験・実践していきたい。

（文　遠藤智栄）

クリーン仙台推進員
クリーンメイト活動事例集

発行：仙台市環境局廃棄物管理課　(2009.8)
(非売品・仙台市 Web サイトに掲載中)
http://www.city.sendai.jp/kankyou/haikibutsu/clean/01_jirei/01_000_mokuji.html



仙台市環境局と協働で発行
住民自治の基本的考え方と実例を、ごみ適正排出・減量の取り組み事例から解説する

「皆さん NHK の『ご近所の底力』という番組を知っていますか？あそこには地域活動のヒントがたくさん隠されています」。これは、加藤哲夫さんが講師を勤める仙台市のクリーン仙台推進員研修会での一節だ。地域課題は自治会等特定の人だけではなく、困っている人みんなで話し合って決める。ほかの地域の成功事例となぜ成功したかのヒントを知る。そして、自分たちが取り組むことを公に宣言し実践につなげる。番組はその結果どう取り組んでいるかを追いかけてレポートする。「行政は、この番組のような役割をしないとね」。人事異動で同事業の担当となった私に、加藤さんはさっそく問題提起をしてきた。そこで、お知らせのみだった推進員向け通信に「こんにちは推進員さん」コーナーを新設。「目からうろこの成功事例」や「それでもやっぱり困っている事例」などコツコツ足で稼いだ事例を紹介し続けて２年経ったある日。これを冊子にして配布したいと加藤さんに相談すると「地域には小さいながらも優れた事例がたくさんあるけれど、冊子化している自治体はない。一緒にやりましょう」。こうして作成したのがこの冊子である。

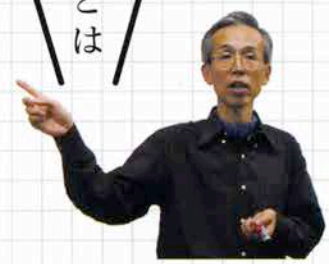
冊子の構成は『ご近所の底力』を手本に、ただ事例を掲載するのではなく、掲載した事例のどこがポイントなのかを箇条書きで抽出。市民活動の専門家として加藤さんに一言コメントをもらったり、困っているトピックで検索できるようにしたり、初めて推進員になる方に住民自治の基本を知ってもらうため、加藤さんの基調講演もテープを起こして掲載した。

「理念、手法、成功事例。この３点セットをあわせて提供することが、住民の活動を促進させるポイントだよ」。試行錯誤の繰り返しだったが。そんな加藤さんの一言が、今でも深く心に残り、行政マンとして日々の仕事の中で意識をし続けている。　(文　中西百合)

Chronicle

加藤哲夫さんのプロフィールと年表

加藤哲夫とは



加藤哲夫さんはどのような人物だったのでしょうか。
生前本人が作成したプロフィールを紹介します。

加藤 哲夫 プロフィール（2010 年 2 月 20 日版　本人作成）

1949 年福島県生まれ。広告代理店勤務を経て 1976 年より宝石貴金属卸業を 1989 年まで営む。本業のかたわら 1981 年に出版社「カタツムリ社」を設立、1985 年には、エコロジーショップ「ぐりん・ぴいす」を開店。環境・エネルギー問題・食と有機農業・平和運動などに取り組む。また、1986 年からエイズ問題に関わり、1991 年から HIV 薬害訴訟を支援、1993 年には患者・感染者サポートの民間団体「東北 HIV コミュニケーションズ」を設立して活動してきた。1992 年より [独占するより分かち合う] をテーマに全国的な起業サポートと事業者の異業種交流ネットワーク「エコロジー事業研究会」を 10 年間にわたって主宰。

1995 年頃から、市民活動 /NPO による新しい市民社会のシステづくりに積極的に取り組んで、1997 年 11 月に民設民営による NPO 支援センター「せんだい・みやぎ NPO センター」を設立立、1999 年特定非営利活動法人化して、代表理事・常務理事を務めてきた。1999 年 6 月より、仙台市の市民活動支援施設「仙台市市民活動サポートセンター」の管理･運営をせんだい･みや ぎ NPO センターで受託している。2007 年より「仙台市シニア活動支援センター」、2008 年より「多賀城市市民活動サポートセンター」、2009 年より「名取市市民活動支援センター」を受託し ている。また 2000 年より企業との協働による、NPO 支援のシステム「サポート資源提供システム」および「地域貢献サポートファンドみんみん」を開発･設立･運用し、2008 年から日本財団 CANPAN との協働により「地域公益ポータルサイトみんみん」を開設。

全国区の活動として、年間 130 回以上、行政職員研修、NPO マネジメント研修等幅広 いテーマの講演・ワークショップを行い、全国を飛び回っている他、多数の著作がある。

プロフィール

役職

せんだい・みやぎ NPO センター 代表理事
東北 HIV コミュニケーションズ 代表 1993 ～ 顧問 2004 ～
東北ソーシャルビジネス推進協議会 会長 2009 ～
一般社団法人 日本サードセクター経営者協会 代表理事 2009 ～
多賀城市「地域経営アドバイザー」2007 ～
日本 NPO 学会 理事 1999 ～ 2003　2006 ～ 2007　2010 ～ 2011
特定非営利活動法人 日本 NPO センター 理事 1996 ～ 2008
特定非営利活動法人 市民コンピュータコミュニケーション研究会 理事 ～ 2009
カタツムリ社 代表 1981 ～
宮城大学事業構想学部 客員教授 2008 ～「非営利経営論」2006 ～
尚絅学院大学総合人間科学部 非常勤講師「共生社会特論」2006 ～ 2009
東北公益文科大学大学院 非常勤講師「コミュニティビジネス起業論」2005 ～ 2006

著書

『加藤哲夫のブックニュース最前線』（無明舎出版）
『NPO その本質と可能性』（せんだい・みやぎ NPO センター）
『市民の日本語 /NPO の可能性とコミュニケーション』（ひつじ書房 ）
『一夜でわかる！「NPO」のつくり方』（主婦の友社）
『NPO の本質とその経営とは』（淡海ネットワークセンター）
『加藤哲夫のブックトーク』DVD ブック Vol.1 Vol.2（book Cafe 火星の庭）

「カタツムリ社／ぐりん・びいす」時代の加藤さん

せんだい・みやぎ NPO センター、加藤さんのデスク

環境学習リーダー養成講座にて

2001 年、イギリス視察の一コマ（左から2番目が加藤さん）

加藤哲夫さん年表

加藤哲夫さんは、なぜ、NPOや市民活動に取り組むようになったのだろうか。

それを解く手掛かりとして、加藤さんの生きた時代や活動時期の社会の動きを、大阪ボランティア協会ボランタリズム研究所監修『日本ボランティア・NPO・市民活動年表』（赤石書店　2014）を参考に調べてみた。また、仙台市における当該時期のトピックスも、『仙台市史』や仙台市ホームページを基にまとめ一覧にした。加藤さんの活動の背景にあるものを推測する手助けとしていただきたい。

（担当　大津賢哉・佐々木秀之）

1949（西暦）	年齢	福島県会津若松市、8月誕生	※仙台の動き	※世の中の動き
	0		『河北新報』仙台市戦災復興計画事業を復興率85％と報じる	「人権擁護委員法」公布 「身体障害者福祉法」公布 「尾瀬保存期成同盟」結成
1954	6	小学校入学	仙台市、仙台市青少年問題協議会を設置	「売春禁止法基成全国婦人大会」開催 「ろうあ者にも運転免許を！」全国一周自動車キャラバン実施 「第五福竜丸事件」発覚
1960	12	中学校入学	安保公聴会やゼネラルストライキ	イギリスで「CSV」設立、「チャリティ法」制定 WHOが「ハンセン病患者の隔離をやめるよう」各国政府に勧告

1963

15 高校入学

「緑と花いっぱい運動」「第1回 健康都市仙台子ども大会」開催
仙台市議会議員選挙で女性の投票率が男性より高くなり、女性初の県議会議員が誕生
ワシントンで人種差別撤廃
黒人の雇用拡大を求めて20万人が大行進
日本初の原子力発電実施

1966

18 大学入学

住民主体の河川浄化運動として、梅田川清掃が盛んになる
「イタイイタイ病対策協議会」結成
国連で「国際人権規約」採択
自動車・クーラー・カラーテレビが「三種の神器」

1976

28 宝石貴金属卸業

「市民総ボランティア運動」を実施
「彫刻のあるまちづくり事業」を開始
熊本地検がチッソ社長らを「業務上過失致死傷罪」で起訴
アメリカとソビエトが「平和目的地下核爆発制限条約」に調印
「第1次横田基地騒音公害訴訟」提訴

1981

33 出版社「カタツムリ社」設立、みやぎ自然食生活研究会（1981-1986）

仙台市、道路粉じん問題研究会設置、粉じんとスパイクタイヤの因果関係の解明に取り組む
政府、12月9日を「障害者の日」とすることを決定
「患者の権利に関する宣言」採択（通称：リスボン宣言）
古紙再生促進センターが「グリーンマーク」を制定

1985

37 エコロジーショップ「ぐりん・ぴいす」開店

仙台市、国の「福祉ボランティアのまちづくり事業」の指定を受け、ボランティアセンターを開設
厚生省、アメリカより一時帰国中の男性を「エイズ患者第1号」に認定
国連総会で総会「外国人の人権宣言」採択
国連総会で毎年12月5日を「国際ボランティア・デー」とすることを決定

1986

38 「センダードマッププロジェクト」日本初地域の市民活動団体調査

「スパイクタイヤ対策条例」施行
「SENDAI光のページェント」開始
国連総会で「児童の保護・福祉に関する宣言」を採択
「チェルノブイリ原発事故」発生
「東京サミット」開催

1991

43 「HIV薬害訴訟」を支援

「第1回定禅寺ストリートジャズフェスティバル in 仙台」開催
京都で「地球子ども会議」開催
日本政府、アイヌ民族を国連人権規約の少数民族として認める

1992

44 「エコロジー事業研究会」(1992-2002)

全国生涯学習フェスティバルまなびピア'92開催
水俣市が「環境モデル都市づくり」宣言
「国連平和維持活動協力法」公布
地球サミットと並行して「NGOフォーラム」開催

1993

45 「東北HIVコミュニケーションズ」設立

「仙台市民オンブズマン」結成
「障害者基本法」公布・施行
ウィーンで「世界人権会議」開催
「環境基本法」公布・施行

1994

46 「仙台NPO研究会」設立

仙台で「全国市民オンブズマン大会」開催
横浜で「第10回国際エイズ会議」開催
日本「子どもの権利条約」批准
横浜で「第1回国連防災世界会議」開催

1995

47 「市民活動地域支援システム研究会」(1995-1997)

社の都の風土を育む景観条例制定
日本、「人権差別撤廃条約」に加入
「阪神・淡路大震災」発生、「防災対策基本法」改定公布・施行
東京で「第1回ゼロミッションに関する世界会議」開催

1996

48

「特定非営利活動法人 日本NPOセンター」理事就任

「ひとにやさしいまちづくり条例」制定
薬害エイズ訴訟で、製薬4社と国・原告側との和解成立
与党3党は衆議院に「市民活動促進法案」を提出

1997

49

「せんだい・みやぎNPOセンター」設立
『加藤哲夫ブックニュース最前線』無名舎出版

国際ゆめ交流博覧会開催
「介護保険法」公布
沖縄で「第1回国際女性ネットワーク会議」開催
京都市で「気候変動枠組条約第3回締約国会議」開催（京都議定書を採択）

1998

50

「市民活動フォーラムせんだい'98」を実施

「仙台市民公益活動の促進に関する条例」が制定
特定非営利活動促進法（NPO法）成立

1999

51

「日本NPO学会」理事就任
「せんだい・みやぎNPOセンター」特定非営利活動法人格取得
「仙台市市民活動サポートセンター」管理・運営受託

「ごみの散乱のない快適なまちづくりに関する条例」が策定
『市民活動ハンドブック』（仙台市）発行
「日本パラリンピック協会」発足
「男女共同参画社会基本法」公布・施行
「東海村JOC臨界事故」が発生

2000

52

企業とNPO交流広場「PONPO・NET」開催

「伊達ロックフェスティバル」開催
衆議院本会議で「ハンセン病問題に関する決議」を全会一致で採択
長崎で「核兵器廃絶地球市民会議」開催

2001

53

企業との協働による、NPO支援のシステム「サポート資源提供システム」運用
および「地域貢献サポートファンドみんみん」運営

「みやぎNPOプラザ」開館
NPO支援税制開始
ニューヨーク、ワシントンなどに同時多発テロ発生

2005

57

「コミュニティ自立研究会」
「東北公益文科大学大学院」非常勤講師就任

仙台アーケード街トラック暴走事件が起こる
「障害者自立支援法」公布
神戸で「国連防災世界会議」開催

2006

58

「尚絅学院大学総合人間科学部」非常勤講師就任

仙台ナンバー導入
志賀原発2号機運転差し止め判決
「公益法人制度改革」関連法公布

2008

60

「地域公益ポータルサイトみんみん」開設
「宮城大学事業構想学部」客員教授就任
「多賀城市市民活動サポートセンター」管理運営受託

岩手・宮城内陸地震発生
「ハンセン病問題基本法」公布
「新テロ対策特別措置法」公布・施行
リーマン・ショック

2009

61

「東北ソーシャルビジネス推進協議会」会長

仙台市市長選挙の結果、政令指定都市初の女性市長誕生
「水俣病特別措置法」公布・施行
総務省による「地域おこし協力隊事業」開始
「消費者庁」発足

2011

63

「みやぎ連携復興センター」設立
膵臓がんのため、逝去。 8月26日 午前0時30分永眠

NPO法人数が4万人を超える
東日本大震災発生

本冊子を作成するために、宮城県を中心に東北で活躍する加藤哲夫氏にゆかりのある人物を訪ね歩いた。そこには、加藤氏の教えや思いが、どのような形で活かされているのかを明らかにするという目的があった。

東日本大震災は、東北に甚大な被害を及ぼすとともに、東北の課題を顕在化させたといわれている。一方、東北から新たなものを生み出してもいる。「協働のまちづくり」や「社会起業家」といったキーワードがその一つであり、それらは加藤氏が長年手がけてきたものでもあった。本冊子では、そうした実践者を取り上げ、ヒアリングを通して、その背景や経緯を解明していった。ヒアリングは、「加藤氏の思いのDNAが引き継がれていく」といった仮説をもとに実施していったのであるが、それがどうであったかは、読者の判断に委ねたいと思う。ただ、少なくとも本書の取材を通して、加藤氏の理念や思いを共感するリーダーが誕生し、震災復興や市民社会に新たな息吹を吹きこむリーダーシップが発揮されていることは明らかになったといえよう。

K・PROJECTでは、本冊子の編集と同時に、加藤氏の残した資料や書籍を活用してのワークショップや企画展を各地で開催してきた。加藤氏の資料はいわば非営利組織にとっての「古典」のようなものであり、ここから学べるものはまだまだあることに気づかされた。ワークショップや企画展には多くの方が訪れ、自身の活動を振り返る機会となっている。

加藤氏の逝去から4年が過ぎた。それはすなわち東日本大震災から4年が過ぎたことを意味する。加藤氏は亡くなる直前まで、東北復興は「私たちが目指すべき日本の姿」づくりとなるべきであることを伝え、具体策を模索し続けていた。その想いを受け継いだ挑戦者達の物語り、こうした積み重ねの延長線上に新たな東北、目指すべき日本の姿といったものが見えてくるのかもしれない。このプロジェクトは次年度も継続する。加藤氏の遺したものを明らかにしながら、加藤氏がやり残したことを成しえていきたいと思う。

プロジェクトリーダー　**佐々木秀之**

K-PROJECT 編集委員会

編著 …… 青木 ユカリ
伊藤 浩子
遠藤 智栄
大津 賢哉
葛西 淳子
佐々木 秀之
高尾 詩乃
高橋 結
田中 聡子
中西 百合
方 芳

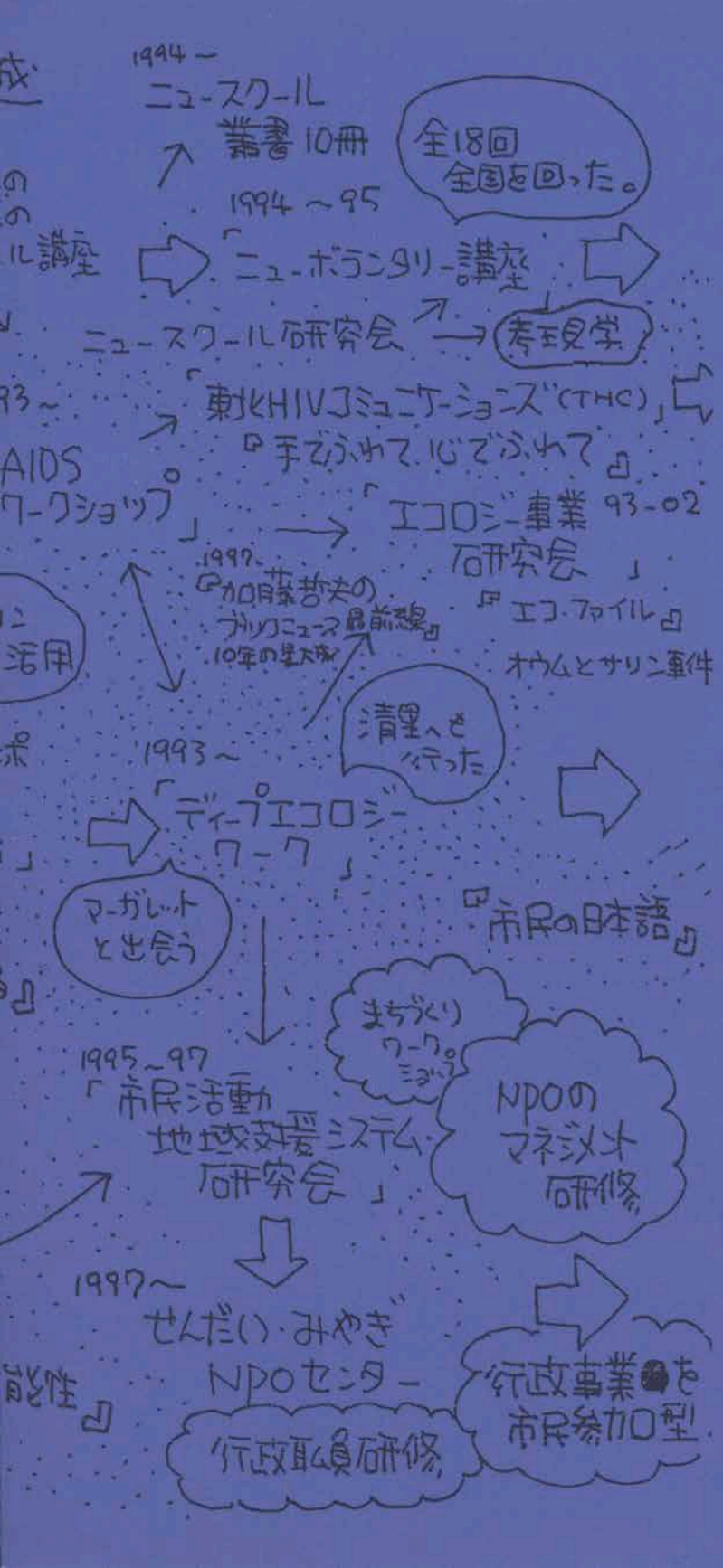
ブックデザイン　大須デザインスタジオ
取材撮影　大須 勝彦

蝸牛評伝（かぎゅうひょうでん）～加藤哲夫の遺したものと市民社会イノベーション～

発行日　2015 年 3 月 31 日発行
発　行　特定非営利活動法人せんだい・みやぎＮＰＯセンター
〒 980-0804 仙台市青葉区大町 2-6-27 岡元ビル 7 階
TEL 022-264-1281　FAX 022-264-1209
e-mail minmin@minmin.org
www.minmin.org

Supported by 日本財団 THE NIPPON FOUNDATION
本誌は、公益財団法人日本財団の助成により作成しました。

ISBN 978-4-9908429-0-1



K-PROJECT 編集委員会・編